

「お酒を語る会」議事要旨

1 日 時 平成 20 年 11 月 17 日(月)13 時 30 分～15 時 40 分

2 場 所 関東信越国税局 第二会議室

3 出席者（敬称略）

【消費者等：6名（五十音順）】

小 島 寿美子	団体職員	群馬県
澤 田 真由美	税理士	栃木県
鈴 木 くに子	会社役員	茨城県
東 村 里恵子	フリーアナウンサー	新潟県
丸 山 幸 子	会社役員	埼玉県
吉 村 結城子	唼酒師	長野県

【清酒の蔵元】

町 田 恵 美 杜氏

【司会】

山 根 聖 美 フリーアナウンサー

【酒類業界代表者：3名】

小 山 景 市	日本酒造組合中央会	関東信越支部	支部長
萩 原 哲 夫	全国卸売酒販組合中央会	関東信越支部	支部長
石 川 泰次郎	全国小売酒販組合中央会	関東信越支部	副支部長

【関東信越国税局：5名】

杉江局長、大澤課税第二部長、中井酒類監理官、佐藤鑑定官室長、加藤酒税課長

4 内 容

「お酒を語る会」は、開会后、出席者の紹介、国税局長のあいさつ、配付資料の説明をした後、当国税局管内6県の各方面で活躍されている女性の方々から、お酒について消費者の視点に立った多岐にわたる意見が述べられました。意見の概要は次のとおりです。

(1) 清酒の蔵元で働く女性杜氏等からの発言。

(女性杜氏)

【職業を選択した動機】

・清酒は子供のころには飲めないもので身近なものとは感じられず、蔵人（酒造従業員）と寝食を共にするが嫌でした。

・地元の高校卒業後、東京の学校に進学し、東京の日本橋で25歳までOLをしていましたが、転職を考えていた時に、母から「転職するなら家に帰ってこない？」と言われたのが地元に戻ったきっかけです。

・家に帰った時には酒蔵の事務と接客をするのかと思っていました。しかし、その時代は清酒の生産量も減り、清酒の売上げも減り、人件費を抑えなければなりません。そこで、社長である父が地元の人たちで酒造りをするのを決めたのですが、力仕事で若い人が足りないこともあり、私も自然と蔵の仕事をするようになりました。

【酒造りの思い等】

・清酒の生産量は昭和50年ころがピークで、造れば売れた、いわゆる「良き時代」でしたが、私はその時代を知りません。

・最初の4年間は、夫や社員を含め計4人で杜氏から仕事を教えてもらいました。その時に「酒造りの責任」も教えてもらいました。現在父親が社長として会社経営をしていますが、その跡を継ぐ時に現場を知らないと言われている経営者にはなれないと思っています。現場を知ることは、中小規模の蔵が生き残るための絶対条件だと思い、今も継続しています。

・昔から様々な説がありますが、女性の杜氏が少ないのには、「女性は蔵に入ってはいけない。」と言われていたからです。これは清酒や水、米などの重い物を運ぶ力仕事が必要なことや、蔵の中は全般的に寒いこと、また、作業によっては40度くらいの部屋に入ることもあり、労働条件が厳しいことなどが原因と考えられます。

・女性で得をしたことは、女性杜氏が少ないこともあり新聞に取り上げられたり、いろいろな方面から声を掛けていただいたりするなど、自社等のPRができることです。

（唎酒師）

【職業を選択した動機】

・学生のころは焼酎や泡盛を飲んでいましたが、私が就職して地元に戻った最初の冬に、寒い中仕事から帰ると、母がすぐに清酒を熱燗にしてくれたことがありました。それを飲んだ時にとってもおいしくて、それから清酒のおいしさ、味に目覚めました。

・それ以来、毎日「晩酌日記」をつけて、飲んだお酒のラベルを年間200～300種類保存していろいろ研究していましたが、新聞で唎酒師資格を知り、周りの勧めもあって資格を取りました。家業がお酒に関係があるわけではありませんが、大学生や新社会人に公民館等で清酒の基礎知識や飲み方などを講義しています。

(2) 消費者の視点から、当国税局管内6県下の女性の方々からの発言。

【お酒とのかかわり等について】

飲酒動機、現在の飲酒状況、飲酒傾向の変化、お酒の飲み方などの意見

- ・お酒は大好きで、仕事のストレスを解消するために毎日晚酌としてビールを1本飲んでいきます。
- ・ビールには苦みや爽快感があり、私の一日のご褒美として体が感覚を覚えてしまっています。清酒は、OL時代に上司に連れられて飲まされたことや、体調の悪い時に飲んで二日酔いになったせいか、体質的に合わないとの思い込みがあります。
- ・以前と比べて接待でお酒の席を設けることが少なくなりました。仲間同士、身内同士で女性が多い時には、ビール、カクテル、ワイン等は飲みますが、清酒を熱燗で飲むことは余りありません。
- ・私は仕事柄、特別に男性が多い環境の中におり、宴席では清酒を飲むことが多く、また、宴席の回数も極端に多くあります。
- ・周りの人は私が清酒を好きなことを知っていて、以前は贈答品で頂くお酒は清酒が多かったのですが、最近ではワインが極端に増えた気がします。
- ・私の職場は懇親を深めるための宴席が非常に多い職場です。学生のころはビールを主に飲んでいましたが、最近は清酒を好んで飲むようになりました。
- ・清酒は先輩に注がれて飲まなくてはならないものとしていやいや飲んでいましたが、年を重ねて気がつくると清酒にも一つ一つに味があったり、香りがあったり、それぞれ違った特徴のあることがわかりました。
- ・私はビールの苦みや爽快感が苦手で、すっきり飲みやすい清酒を好んで飲むようになりました。カクテルは甘いものが多い気がするので余り飲みませんが、ワインは好んで飲みます。
- ・私は自宅で飲むことは無くて、様々な会合に出た時に付き合いでお酒を頂くことが多く、日本料理が出た時には清酒、フランス料理の時にはワインがあるとおいしいと思います。
- ・お酒は人と人とを和ませる、人をその場になじませるためには、良いものだと思いますが、自動車で移動することもあり、飲酒運転は厳禁ですので飲酒の機会が減っています。
- ・私は自宅で飲むことはありません。お酒の種類ではビールが好きで、乾杯の

ビールは一口目が何とも言えません。今住んでいるところは、驚いたことに清酒で乾杯することが多く、今ではそれにも慣れました。また、地域づくりなどに積極的に取り組んでいて、そういった会合で飲む機会がたくさんあります。この地域では身近で安く清酒を購入することができ、意識して清酒を飲んでいきます。本当に酒文化が根付いている地域だと感じています。

- ・今、厳しい時代と言われて、「清酒がんばっていこう」との活動が多く見られ、ホテルなどで 200 人～300 人規模の酒蔵や酒造組合主催イベントの「お酒を楽しむ会」が積極的に開催されており、私も参加して飲ませていただいています。

- ・ある酒蔵では「参加者を募り、寒い時期に雪山を登って水汲みを行い、その水から仕込んだ清酒をその参加者が一番に飲む」という取組を行っており、私も参加しましたが、消費者として出来たての清酒を飲める喜びや、参加した喜びを感じるにより、清酒との距離が縮まっているのを感じました。

- ・私の住んでいる地域で 1 つの酒蔵が廃業の危機に直面し、地域住民は継続させたいとの思いもありましたが、厳しい現実があって、結果的に廃業してしまいました。非常に残念だと思いました。

- ・特に、地元の若い世代が地元で作られている大事な物に気がつかない傾向があり、大規模なお酒のイベントでも地元以外の方が盛り上げようとしているのが現実で、地元意識が希薄になってきています。

- ・私は毎晩自宅で母と 2 人で清酒のお燗をつけてじっくり飲んで楽しんでおり、家族 4 人全員がそろそろ夕飯で清酒を一升は飲みます。

- ・地元では消防団にも入っています。地域行事には何かとお酒が付き物で、地域の集会場でも飲むことも多く、生活の中にお酒があるという感じです。

- ・私は、自宅でコップ酒を 2 杯、3 杯飲みますが、外で飲む機会は余りありません。外では接客側に回って酔わないように、清酒と同量の水を飲むことにしています。清酒を飲みながら飲む水を「和らぎ水」と言って推進していますが、薄めながら飲むと悪酔いしません。

- ・夏には冷やで生酒、原酒、大吟醸とか香りのある清酒を、ワイングラスのようなきれいなグラスに注いで飲みます。子供を寝かせ、グラスに清酒を注いで、お香をたいて飲むと至福の時を感じます。秋冬は純米酒、本醸造、特別純米などの清酒を、好んで常温やぬる燗で飲んでいきます。

- ・ビールは飲みますが、ワインは渋みがあり、和食中心の我が家のメニューには合わないのでも、清酒を飲むことが多くなっています。

【お酒のイメージについて】

特に清酒のイメージ、清酒の消費が低迷している原因などの意見

・お酒と言えば「清酒」が浮かんできます。また、清酒は「中高年の男の人が飲むもの」、「酔っ払ったお父さんのきついにおい」、「会社の付き合いで飲まされる」というイメージがあります。

・清酒の冷酒をおしゃれな器から注がれた時は、非常においしく感じたことがあります。徳利に入った清酒はおいしそうには見えません。おしゃれな器に入った清酒はおいしそうなイメージを持っています。

・二日酔いになってダウンした時には、「前日に飲んだのが清酒だったからだ」とのイメージを持ててしまいます。

・清酒はビールと比べて臭うと思いますが、ワインも臭うしブランデーも香りがします。清酒にはにおいをはじめとした悪いイメージの固定観念があり、飲まず嫌が多いと確信しています。この悪いイメージの固定観念の壁を破っていきたいです。

・私は清酒が大好きで、おいしいし、良いにおいだな、良い香りだなと思って飲んでいますが、職場の女性に聞くとビール、ワイン、焼酎を飲んでいて、清酒は次の日に残るので飲まないと言っており、一般的にそのようなイメージを持っていると感じました。私の経験では、どんなお酒でも飲み過ぎれば次の日に残ると思いますし、清酒だから二日酔いになるというイメージはありません。

・職場の女性を見ていると、宴席で圧倒的にワインを好んで飲んでいる気がしているのですが、実は次の日に残ることを考えて焼酎を飲んでいるようです。また、ビールは会の途中でトイレに通うことが多くなるため、飲むのをためらっているとのことでした。

・若い人はイメージに左右されがちで、学生のころはカロリーが低いから焼酎ばかり飲んでいて、30歳代になったら体に良いのは清酒と言われて、清酒を飲むような感じでした。

・清酒は、中高年の男性が飲むものとのイメージで、清酒を飲む人はお酒に強いとのイメージもあります。

・夏にガラスの器で氷が入っている冷酒が出されると、清酒は無色透明できれいだなあと感じます。

・私のお酒に対するイメージは、昼食にはビールやワイン、夜宴会では清酒が思い浮かび、昼間から清酒を飲みたいとは思いません。

・清酒はたくさんの方が楽しく和気あいあいとするためには良く、宴席でお互いを知り合う時や注ぎ合う時には良いイメージがあります。カップルがしゃれ

たところで飲むのはワインやシャンパンのイメージだと思います。

・会社の従業員は、自宅でビールや発泡酒などを飲んでいるようです。会社の宴会では、平均年齢が高いせいかわりに清酒を飲みます。

・清酒のイメージは、まず一升瓶で、地元で祭りの時にすごい勢いでかぶるように飲むイメージです。転居する前は、中高年の男性が赤提灯のちょっと古びた居酒屋でちびちび楽しむ姿がイメージされましたが、今では清酒が身近な存在となってイメージが変わりました。

・ワインはPRがうまく、イメージ作りがうまいと思います。ボージョレ・ヌーボー解禁は日本に根付いた文化ではありませんが、うまく宣伝して消費者に“スペシャル感”を与えています。特に女性には「健康に良い」とか「おしゃれそうだから」などのイメージに酔いしれる傾向があるので、清酒も今後の需要拡大に可能性があると思っています。

・宴会の場に水があると「休んでいるんじゃないの？」とか「駄目だよ、水なんか飲んじゃ」と言われてしまうように、一般消費者は「和らぎ水」のことを知りません。例えば、清酒と水をセットにして販売するとか、「和らぎ水」を飲みながら清酒を楽しもうとか、清酒を水と一緒に飲むと更においしく飲めて楽しめることをもっと広げたらよいと思います。

・私は清酒に対して、「年配の飲物」、「種類などが難しい」、「和食に合う」、「祭りなどの伝統行事に欠かせない日本の伝統文化の1つ」というイメージを持っています。

・清酒を飲み初めた周りの仲間や若い人に聞いてみると、清酒のイメージは甘くてベタベタしていると答える人が多かったようです。また、お酒を飲み初めた若いころに、安い居酒屋の飲み放題などで飲まされた清酒が、ベタベタして気持ち悪くて嫌いになり、それ以来ビールや焼酎を飲んでいるという人が多いようです。

・私も20歳代の前半は清酒に対するイメージは悪く、中高年の飲物と思っていましたが、淡麗辛口のすっきりした飲みやすい清酒を飲んで、「あー、清酒ってこんなにいいんだ」と思いました。初心者は淡麗辛口、淡麗なものが適していると思います。

・清酒のイメージが悪くて、飲まず嫌いではないかと思っていますので、とりあえず飲んでいただきたいと言いたいですし、多くの人に飲む機会を作って、良い清酒を飲んでいただきたいと思っています。

・清酒、日本酒のイメージに壁があり、少しずつその壁を破っていきたいのですが、日本文化に対しての抵抗や壁があり、着物や落語、歌舞伎、相撲などと同様に「えー」と言われてしまいます。洋服やミュージカル、オペラなど洋風

なものだったら抵抗感はないのですが、日本文化だとどうしても抵抗感が出るのだと思います。私自身も着物に抵抗がありましたが、着付けを習って着物を着るようになり、今では外出する時に洋服だけでなく、着物も選択できるようになりました。日本文化や清酒、日本酒に対する抵抗や壁はあると思っています。

【年齢 20 歳代から 30 歳代の酒離れについて】

年齢 20 歳代から 30 歳代の酒離れ現象が見られると言われているが、あなたの周りでこのような現象が見られるか、このような現象が起きている原因は何かなどの意見

- ・職場やお付き合いで無理に飲まされたり、年配者との宴席で飲んだりするものに清酒が多いため、若い人たちには楽しい酒席というイメージがなくなってしまいます。
- ・若い人たちが友たち同士で楽しく飲む時には、おしゃれだとか、格好がよく見えるものが好まれています。
- ・お酒を飲み初めた時においしい清酒を口にできれば清酒のファンになり、そのイメージは残りますので、最初にお酒を飲む時においしい清酒を飲む機会があると良いと思います。

- ・私も若い人がお酒を飲まないことを痛切に感じていますが、若い人は同世代とはお酒を飲みますが、上司や先輩などの世代を超えた宴会は極端に嫌う傾向があると感じています。
- ・現在は車社会で、飲酒運転の問題もありますので、自動車通勤の人が飲酒した場合には、代行車で帰宅しなければなりません。そうなりますと、宴会費用のほかに代行車代金もかかってしまい、金銭的な負担が大きくなってしまいます。若い人たちは自動車通勤が多く、これも飲酒が減っている原因だと思います。

- ・前の職場は自宅から 20Km ぐらい離れたところにあり、職場での飲み会は出ても一切飲みませんでした。飲んでしまうと電車を乗り継いだり、駅からタクシーや代行車で帰ったりと大変ですし、また、女性は代行車を使いたがらないとも思います。現在の職場は自宅から 7、8 Km の距離であり、タクシーでも帰れるので最近では以前より飲んでいきます。

- ・不況と言われており、居酒屋を選ぶのもお酒を買うのも価格の安いものを探している人が多く、健康ブームで自分の健康管理や体調にあったものを選んでいきます。

・若い人たちのコミュニケーションの取り方が、昔のような上司に誘われて飲みに行くという雰囲気ではなく、仲間同士で、夜にファミリーレストランでたむろし、お酒が無くてはよくて、コーヒーを飲むだけのようなものに変わってきていると感じています。

・大学生と地域づくり等で触れ合う機会があり、宴会で清酒を初めて飲むなどの声が聞かれ、飲んでみるとおいしいとの反応があります。若い世代は、飲み会等を嫌っている傾向があり、地元では昔ながらに隣同士でお酒を飲むとか、近所の公会堂で飲む機会が多いようです。

・若い時には、お金が無いので安酒に走ってしまうのは仕方のないことだと思います。おいしい清酒をどのようにしたら若い人たちに飲んでもらえるのか、例えば、成人式の日においしいお酒を配ったりして、おいしい感動を味わせるのも1つの方法だと思います。

・豊かな時代となり、酒を飲まなくてもほかに楽しめる趣味などがありますので、ストレス発散にお酒が無くては良いと感じているようです。

・病院の先生が、健康のためには清酒より焼酎が良いと言っていて、それが正しいからと焼酎を飲んでいる人もいると思われませんが、それが本当かどうかわからないのに、そのような情報が流れることは恐ろしいことです。

・一消費者として感じていることは、女性の一人暮らしには一升瓶は大きすぎて、少量の容器をもっと出してほしいですし、若い世代の方も多くの種類の清酒を少量で多く楽しめるほうが飲むかもしれません。

・周りの若い友人に聞いてみますと、今はたくさんの娯楽があり、例えば、携帯電話の通信費にお金をかけたいとかで、お酒を飲むのが唯一の娯楽、楽しみだった時代とは違うと言っています。

・清酒をなぜ飲まないのか、なぜ清酒から離れていくのかと尋ねますと、ベタベタして気持ち悪いか、清酒がよくわからないという意見が多く、若い人の飲み初めの時点でおいしいお酒に出会えて、女性も取っつきやすくするなど、飲みやすい環境を作る工夫をすればよいと思います。

・今まで意見のあった清酒を飲まない若い人たちに、清酒を飲んでくれとも言えませんし、消費量が減少している厳しい状況の中、製造している側はめげることなく明るく楽しく、がんばっていく必要があると思います。

・酒売場には、お酒について知識のあるアドバイザーがほとんどいませんし、いたとしても若い人たちはお勧めのお酒について聞きませんので、そこが難しいと思います。

【酒類製造者（メーカー）や酒販売店・料理飲食店に望むもの】

贈答や慶弔時にお酒を選択するか、プレゼントで受け取ってうれしいお酒、女性向けの清酒などの商品開発、料理とお酒の相性、料理飲食店で提供の仕方、値段等、消費者の立場から、どう思うかなどの意見

- ・見て感動する容器に入っているものや、今年初めて搾ったお酒などのプレミア的なものをプレゼントでもらったらうれしいと思います。
- ・同じ種類の清酒が、すべて色の違うおしゃれな 300ml 容器入りの瓶 6 本に入ったセットを贈答で頂きましたが、少量で良かったです。
- ・女性は見た目が大事であり、飲みきれぬ少量できれいな色の変ったデザインの容器に目がいきます。以前プレゼントした清酒は、デザインも変わっており、製造番号が入っていたプレミア的な商品で良かったです。
- ・多くの方に手軽に飲んでいただくよう、清酒のソムリエみたいな、お勧めの酒についてのアドバイスをいただけるとうれしいです。清酒は 500ml の容器入りでも飲みきれませんので、少量で、容器がおしゃれで、ほかのお酒を買ってきてその中に入れて飲めるものがあればいいと思います。
- ・飲食店や造る側からのアプローチとして、小さな枡の酎酒セットで、違いを楽しみながら料理も一緒に楽しむのも 1 つだと思います。
- ・落語を楽しみながら清酒を提案するなど、コラボレーションさせる、清酒がメインではなくて、何かをするがそこにお酒が付いてくるような形の提案もあると思います。
- ・小さな瓶が良いとの話がありましたが、小さくなると価格が高くなってしまふのが悩みだと思います。
- ・一般に飲食店で提供される清酒は、味が変わっているものが余りにも多すぎるとの印象があります。一升瓶を開けてその都度分けて提供していますと、開栓 1 週間後に出される酒は、本来の味でなくなってしまうのが問題です。
- ・飲食店のメニューに多くの種類の清酒を載せすぎても、消費者には意味がわかりにくいと思われます。たまたま注文した清酒がまずいと思うと、ほかの清酒を注文せずに終わってしまいますので、商品の裏ラベルに味の特性や料理との相性などを記載すればよいと思います。
- ・日本酒度や酸度だけがラベルに書いてあっても結局、消費者にはわかりません。

・お土産用としての清酒は、パッケージや瓶、徳利などの容器を工夫するなど、商品の企画をする時にだれをターゲットにするかを明確にする必要があります、広げすぎるとアイテム数が多くなってしまいます。すべてのことはできませんので、できる範囲のことをやっています。

【行政等に望むもの】

・酒税は大事な税金ではありますが、多少でも引き下げれば消費が増えるのではないのでしょうか。

・日本の伝統文化、古き良き日本を見直す「日本に帰ろう」のようなブームを行政側で作って、「日本食」が見直され、その日本食に合う「日本酒」が見直されることができればよいと思います。

・外国に比べて未成年者の飲酒防止に対する行政側の対応が甘いような気がします。

・行政や組合で、地域の清酒の銘柄などを紹介するパンフレット等を作ると清酒をプレゼントする時に参考になりますし、PRにもなります。

・酒販店にお勧めの商品を紹介してくれるソムリエみたいな人がいると、清酒をプレゼントする時に役に立ちますので、行政側でアピールしてほしいです。

・消費者が、ビールは値段が高いからと、値段の安い第二のビールを飲み始めると第二のビールの酒税を引き上げ、今度は消費者が第三のビールを飲み始めると第三のビールの酒税を引き上げようとしします。このように売れるもの売れるものの税金を引き上げていくようなことをしますと、お酒自体から消費者は離れていくような気がしますので、毎日自宅に帰って安らぐお酒について、安全で安定的な価格で購入できるようにしてもらえば、もっと消費は拡大すると思います。

・日本の大事な清酒を造ってくれている特色ある小さな酒蔵が、経営を続けていけるような取組を期待します。

・健康に関することや女性が妊娠した場合、出産した場合にお酒はどうか、メリット、デメリットの両方について、お酒の情報をどんどん公開してほしいと思います。

・ライフスタイルの多様化の一方で、「日本に帰っていきこう」との原点回帰のブームも来つつあると感じます。行政側から日本国の酒、国酒としての清酒に

対する理解を向上させることや、大人の食育の中に清酒を位置づけてほしいと思います。

- ・例えば日本酒検定のような、自分の国の大切な財産について学び、理解できるような制度を国のレベルで作ってほしいと思います。

- ・毎年4月にさいたまスーパーアリーナで開催している「きき酒会」のようなイベントをもっと回数を増やして、効果的なPRをお願いします。また関東信越の6県全部から来ていただけるような日程や時間に開催していただくことを希望します。